Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-23

神戸大学の全学共通授業科目等要覧（シラバス）：アンケート調査の結果

波田，重熙

(Citation)
大學教育研究,07:65-76

(Issue Date)
1999-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81004642

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004642

KOBE UNIVERSITY

神戸大学の全学共通授業科目等要覧（シラバス）
―アンケート調査の結果―

波田重熙（神戸大学大学教育研究センター教授）・研究部

１．はじめに

近年高校教育が急速に多様化し、それに呼応するように全国の大学入試が多様化し、結果として、多様な学生が大学に入学してくるようになった。しかも日本の高等教育がユニバーサル段階に近づいたことによって、我々が直面しているのは主に学生の学力の多様化であり、学力の不揃いである。かっては、大学の入学試験に合格すれば大学教育への準備は一応整っているものとみなすことができた。しかも、今日それは保証の限りではなくなった。しかも、日本の高等教育がエリート段階からマス段階を経てユニバーサル段階へと移る流れの影響は、何も学生だけに現れている訳ではない。当然のことながら、そのことによって、大学教官や大学教育の質そのものにも変化をきたしつつある。

一方、21世紀に向けて、日本が豊かな未来を築き、国際社会の一員として世界の平和と繁栄に貢献していけるかどうか。その鍵を握るのは優れた人材養成と知的創造活動を担う大学であることはいうまでもない。国際化・情報化の急速な進展など、大学を取り巻く環境が大きく変動する中で、大学や大学院の制度が弾力化されたことによって、大学改革における多様な試みが可能となり、今それぞれの大学は特色ある大学づくりに向けた様々な取り組みを模索している。

このような状況が、学部教育の改善に向けた取り組みを促す強い力となって働いている。その重要な柱となる授業の質の向上を図る試みのひとつとして、教授法の工夫（FD）や少人数教育、対話・討論型の双方向的な授業などと共に登場したのが、本報告で取り上げるシラバスである。

シラバスは、平成3年の大学設置基準改正を契機として瞬く間に全国に広がり、平成9年度には全国の538大学（約92%）がシラバスを作成している。国立は99%、公立は84%、私立は91%となっている。神戸大学でも平成7年から、大学教育研究センターが中心となって、大学改革推進経費によって全学共通授業科目のシラバスの発行を開始し、今日に至っている。

そこで、大学教育研究センター研究部では、平成8年11月、平成9年度のシラバスの原稿の作成を依頼した際、教科集団の代表者を通じてシラバスに関するアンケートをお願いした。神戸大学で発行している全学共通授業科目のシラバスを教官がどう受け止めているのかを知ることが目的であった。本報告では、その結果についてまとめを行う。なお、調査結果の概略は、"The Kurihe"の第10号（平成9年10月発行）にも既に報告してある。

２．シラバスの形式と役割

平成3年の大学設置基準改正を契機として、全国の大学がシラバスを作成するようになった。報告者も前任校で既に平成4年から一般教育科目のシラバスの作成に携わってきた。その時議論されたシラバスの効用は、第１に学生が大学で何を、誰から、如何に学ぶことができるかを知り、学習計画を立てることが可能となる点、第２

に教員は自ら責任を持って教育目標を定め、授業計画を立て、教授法を工夫する機会となる点、第３に教員相互の調整と協力が可能となり、講義の充実を図り得る点であった。実際、シラバスによって授業内容を検討してみると、関連する授業科目の間で中身に重複がある一方で重大な欠落や内容に偏りがあるケースが多々あり、これまで、学問の自由の名のもとに、教える内容や教え方は各教員の裁量に任されているという意識がいかに強かったかを反省した教官も少なくなかったのではなかろうか。。

平成10年10月に出された大学審議会による「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性輝く大学－」（答申）の中では、大学が、21世紀における社会状況等を踏まえ、それぞれの理念・目標に基づき多様化・個性化を図りつつ、世界的水準の教育研究を推進するために大学改革を推し進めることを強く求めている。また、大学改革の取り組みを実効あるものにするためには、透明性の高い第三者評価を含めた多元的な評価システムを早急に確立する必要性が強調されている。そこに見られるように、今日の高等教育が担うべき社会性と国際性からすると、大学はもはやこれまでのように閉鎖的ではあり得ないのである。したがって、社会的ニーズを考慮しながら各学部はそれぞれの理念・目標に基づき教育活動を行い、ある能力を身に付けた学生を世の中に送り出し、その学生の質に基づいて教員・大学が評価を受けるようなシステムが今後に導入されていくことは間違いないであろう。その学部・学科の理念・目標を達成する教育内容の計画としてカリキュラムがあり、カリキュラムを構成する具体的な授業計画書がシラバスと呼ばれるものである。すなわち、カリキュラムは大学や学部・学科の存在理由と直接に関わっており、シラバスはその具体的な内容を明らかにする文書であるという重要な役割を担っていることになる。さらに、大学の外部評価が始まれば、シラバスはその際重要な情報源のひとつとなる。

シラバスがどのような意義を持つかについて、平成9年度北海道大学年次報告書「来るべき新世紀に向けて－北大の新たなる展開のために－」は、以下のようになまとめている。

（1）学生に授業内容を提示することで、学生自身はこれから学ぶ目標を理解し、学習のガイド、モチベーションの刺激となる。
（2）教員と学生との情報交換を容易にする。
（3）担当教員が複数である場合、教員同士の共通理解を作り、共通の目標をもって授業担当内容を全体との整合性で進行でき、評価基準も共通にできる。
（4）学生が学習目標をどの程度に達成したかを評価しやすい。
（5）学部間、大学間の単位互換や外部評価の資料となる。

また、日本で作成されているシラバスには、通常以下のような情報が盛り込まれる。

（1）授業に関する基本的情報（授業名、科目区分、対象学部・学科、教室、実施曜日と時間帯）
（2）担当講師に関する情報（講師名、所属、研究室の場所と電話番号、オフィスアワーの曜日と時間）
（3）講義の目的、スケジュール（毎回の授業のテーマと文献に関する情報）
（4）成績評価の方法
（5）教科書、参考書とその入手方法（図書館の所蔵状況）
（6）履修条件。

以下に、シラバスの例を３つ示す。

最初は外国の例として、何人かのアメリカの大学教授が実際にもちいている教育社会学の授業のシラバスを参考に、苅谷（1992）が若干の省略を加えて、日本語として作り直したものである。

教育 240-D60 社会的機会と教育政策

教室：Aホール5-123
時間：火曜１～２時15分
　　木曜１～２時15分
1991年冬学期

担当講師：T．K．
研究室：3-120 Aホール
オフィスアワー：金曜１～３時
電話：123-4567

授業のねらい：
このコースでは次の問題について検討する。(1)若者たちはどのようにして社会のなかで自分の占める地位を獲得するのか。(2)社会は、そのプロセスにどのようにかかわり、若者たちの選抜を行うのか。(3)選抜の過程を人々はどのように通過していくのか。(4)その過程は、能力、個人の選択、親の期待とプレッシャー、学校、性別、人種、社会階級といった要因とどのように結びついているのか。以上の諸問題について、以下に提示する文献を用いて検討を行う。

履修条件：C35、またはC50を履修していること

テーマと文献：

１．学校はメリトクラティックか？
この２回の授業では、学校がメリトクラティックであるかどうか、その意味はいかなるものであるかを検討する。

１月７日
Michael Young, *The Rise of the Meritocracy*（ペーパーバック）

１月９日
Herrnstein, "IQ", *Atlantic*, vol.228, #3, Sep. 1971, pp.44-64（リザーブ）
Alan Gartner, et al., "The New Assault on Equality", in Evans, Kagan, et al. eds. pp.102-109（リザーブ）。

２．学校の影響力
この回には、学校が不平等の是正にどの程度寄与しているかいないのかについて検討する。

１月14日
Christopher Jencks, et al., *Inequality*（ペーパーバック）："Cognitive Skills" (pp.52-109); "Occupational Status" (pp.191-199); "Income" (pp.226-232); and Conclusion (pp.253-265)。
"Perspective on Inequality"（ペーパーバック）, *Harvard Educational Review*, Feb. 1973, vol.43 #1.
Melvlin, "Forensic Social Science" (pp.61-75);
Michaelson, "The Further Responsibility of Intellectuals" (pp.92-105);
Thurow, "Providing The Absense of Positive Associations" (pp.106-112)

（以下、引き続く授業スケジュールと文献については省略）

＊文献については、図書館にリザーブしてあるほか、ペーパーバックは○○書店にて入手可能。論文のコピーは○○コピー店で入手可能。

成績評価：
中間レポート（ダブルスペースで20枚、タイプ仕上げのこと；成績評価の50％）
期末試験（講読文献にもとづく；評価の40％）
授業でのディスカッションへの参加度（評価の10％）

2つ目は、大学改革、なかんずくファカルティ・ディベロップメント（FD）を強力に推し進めている北海道大学が平成9年度北海道大学年次報告書として公表した「来るべき新世紀に向けて―北大の新たなる展開のために―」の中で、「学業成績評価について」の部で示したシラバスの例を次に示す。

医学史

【概略】

医学概論の連続として医学の歴史を題材に医学を考える。

【一般目標】

今日の医学と医学の将来を理解するために，これまでの医学の発展の歴史を認識する。
医学の先駆者の生きた時代背景と業績を知り，自己の医学を学ぶモチベーションを確認する。

【行動目標】（注）

1．医学の先駆者の業績を列挙できる。（認知―想起）
2．医師に求められる人間性について，古代ギリシャの医学思想を論拠に解説できる。（認知―解釈）
3．科学としての医学の発展に必要な人間性，態度について，歴史的具体例から説明できる（認知―解釈）
4．医学の先駆者の業績と当時の社会背景とを関連づけ，発表できる。（情意）
5．医学の歴史を根拠に，現在求められる医学の発展の方向について列挙できる。（認知―問題解決）

【授業内容】

授業順：1コマ90分15回

1．「現在の医学をささえる過去」
オリエンテーション：ミニレクチャー：内容・行動目標把握，グループ分け（10グループ），グループ研究テーマ決定，ビデオ：「みえる世界は広がる」，レポート
2．教員講義60分「アンプロワーズ・パレと外科学」，20分討論，10分レポート
3．教員講義60分「科学による病気の克服：感染症を中心として」，20分討論，10分レポート
4－13．「医学の歴史上の人物と，現在，そして自分」
医学史上の人物を順にとりあげグループ研究し，各授業で1名の人物を中心に順に発表する。
学生グループ研究発表45分，全体討議30分，レポート10分
14．シンポジウム「医学を支える科学と創造，そして未来」
シンポジウムは各グループ代表が約10分発表し，討論，レポート
15．シンポジウム「実践の医学－臨床，患者中心の医療と未来」
前回と同様
レポート「医療に求められる人間性と自分」
「医療の未来をつくる医学研究と自分」

【成績評価】

上記の行動目標に従い
1．学習態度の観察評価
2．グループプリント（発表レジメ）
3．レポート
4．発表討論態度
5．出席状況
6．自己評価

【備考】

略（ここには，授業の形式，グループ研究のための指針等を詳細に述べている。）

注　各行動目標の最後に括弧書きした部分は，シラバスに掲載されていないが，それぞれの目標の分類を示した。この行動目標は，知の構築の順になっていることに気付く。

最後に、本学の例として、神戸大学大学教育研究センターで発行した "SYLLABAS 98"（全学共通授業科目等要覧）（A-4版）より、大学教育研究センター研究部川嶋太津夫助教授（専攻は教育社会学）のシラバスを次に示す。

科目区分　教養原論（人文）
主　　題　人間形成と文化
対象学部　工学部

担当教官　川嶋　太津夫
開講学期　前期　水曜日・1時限
研究室番号　D526
ｵﾌｨｽｱﾜｰ　水曜13:30～15:00
（除く第一水曜日）

発達と教育（2単位）

授業のテーマと目標

本講義では、人間の発達と教育の問題を、次の二つの視点から主に考えてみたいと思います。（1）人間の発達は、人生の特定の時期、たとえば子ども期や青年期のみに特有の現象ではなく、一人一人の誕生から死に至る一生涯にかかわる問題であること。したがって、発達と教育との関係を考察するといっても、必ずしもそれは学校教育のみとの関連で分析することを意味しません。（2）発達を社会的な問題として理解すること。発達の研究には、心理学や神経学などさまざまなアプローチの仕方があります。しかし、この講義でとる立場は「社会学的」なまなざしです。言い替えれば、発達は、文化や社会や時代が異なれば、その有り様も異なるであろう、という前提から出発します。したがって、皆さんが経験している日本人の発達過程と、アメリカ人のそれとは異なるでしょうし、また、あなたがたのお父さんやお母さんのたどった発達過程とも異なっているでしょう。さらにまた、今あなたの隣の席に座っている人とも発達のあり様は異なっているかもしれません。それはなぜなのか？ということを考えてみたいと思います。

授業の内容と計画（予定）

第1回　はじめに－発達と教育－
　　ボルトマン　『人間はどこまで動物か』　岩波新書
　　ローレンツ　『ソロモンの指環』　早川書房
第2回　社会、社会化、発達
　　エルダー　『大恐慌の子どもたち』　明石書店
　　マルソン　『野生児－その神話と真実－』　福村書店
第3回　社会、社会化、発達（続）
　　カーチス　『ことばを知らなかった少女ジーニー』　築地書館
第4回　発達と発達課題－ハヴィーガーストとエリクソン－
　　エリクソン　『幼児期と社会　ⅠⅡ』　みすず書房
第5回　幼児期の発達－家族と言語－
　　アリエス　『＜子供＞の誕生』　みすず書房
第6回　幼児期の発達－家族と言語－（続）
　　バーンステイン　『言語社会化論』　明治図書
第7回　児童期の発達－仲間集団と学校－
　　深谷・上杉　『子どもと青年の形成』　第一法規
第8回　児童期の発達－仲間集団と学校－（続）
　　ブロフィ・グッド　『教師と生徒の人間関係』　北大路書房
　　高旗正人　『パーソンズの教育規範』　アカデミア出版会
第9回　青年期の発達－受験と進路選択－
　　竹内　洋　『立身・苦学・出世』　講談社現代新書
第10回　青年期の発達－受験と進路選択－（続）
　　苅谷剛彦　『大衆教育社会のゆくえ』　中公新書
第11回　中年期と発達－職業と能力開発－
　　レビンソン　『ライフサイクルの心理学　上下』　講談社学術文庫
　　プラース　『日本人の生き方』　岩波書店
第12回　向老期と発達－死と教育－
　　石川弘義　『死の社会心理』　金子書房
　　ハート　『死の学び方』　法蔵館
第13回　ライフコースと生涯学習
　　ラングラン　『生涯教育入門』　全日本社会教育連合会
第14回　まとめ－国際化、高齢化、情報化と発達－

成績評価方法

レポート（50%）　試験（50%）
＊ただし、出欠のチェックが可能な場合は、それを考慮する場合もある。

学生へのメッセージ

質問等があれば、随時発言して下さい。積極的な参加を望みます。

以上示した3つの具体例のうち、アメリカのシラバスには、（1）事務的連絡文書としての性格、（2）法的契約書としての性格、（3）学術情報（レファレンス）文書としての性格、（4）学習指導書的文書としての性格、という4つの側面が盛り込まれている（苅谷、1992）。一方、北海道大学のシラバスは医学部の例で、学生の立場で表現されていることが特徴で、一般目標（その科目を学ぶことによる成果）や行動目標（その科目を学ぶことによって学生が何をできるようになるか説明）という表現はめずらしい。なお、ここでは担当教官名、単位数、教科書・参考書の項目は、省略されている。また、神戸大学のシラバスでは、来年度から記載されている参考書の図書館における所蔵状況がわかるようにした。

３． 大学教育研究センター全学共通授業科目等要覧（シラバス）に関するアンケート調査の結果

以上見てきたように、シラバスは、学生にとっても、教員にとっても重要な教育活動の設計図であり、シラバスのない授業は、シラバスのできない計画性のない授業といわれても仕方ない。しかし、現在日本の多くの大学が公表しているシラバスは、長い歴史を持つアメリカのそれとは随分異なることから、そのあり方を巡ってしばしば論議を呼ぶところとなっている。アメリカのシラバスは１つの授業に対するもので、授業に出るとそれが配られるのに対して、日本型シラバスは全ての授業を網羅する電話帳のように大部のもので、年度初めに配付された後は授業の度に持ち歩くようなものではない、といった指摘がある。

大学教育研究センター研究部では、平成8年11月、神戸大学で発行されている全学共通授業科目のシラバスを教官がどう受け止めているのかを知るために、シラバスに関するアンケート調査を実施した。本報告では、以下に、その調査項目と調査結果、および、自由記述をまとめた上で、それらに対する若干のまとめを行う。

なお、学生に関しては、神戸大学教育システム検討委員会が平成７年6月から7月にかけて実施した「神戸大学教育システムに関する学生アンケート」の中に、シラバスに関するアンケート項目が盛り込まれている。アンケート調査は、当時の2年次・3年次の約半数の学生（2661名、男性：62.9%、女性：37.1%）を対象にして実施された。シラバスに関する部分の集計結果を見てみると、配付された講義要項をどのくらい読んだかに対して、①自分の取りたい科目に関係ないものまで読んだが16.1%、②自分の取りたい科目すべてあるいは一部読んだが70.3%で、これに対して、③殆どあるいは全く読んでいない学生は6.7%に過ぎなかった。また、どのようなときに役立ったか（2つまでの多重回答）に対しては、①履修科目を選択する上でが84.4%に上り、②受講科目の学習計画を立てる上でが21.9%で、③受講科目の予習・復習をするのにと答えたのは、さすがに2.4%に過ぎなかった（それでも、医学部13.0%、経営学部（昼間主）5.6%、同（夜間主）18.2%に上った）。以上のように、大多数の学生が少なくとも一度はシラバスに目を通しており、とくに、人文科学系の学生はよく読んでいる。また、その使用法には学部間の違いがあり、医や経営の学生は他学部の学生より予習・復習に役立てている、という調査結果が出ている。

さて、今回のアンケート調査は、それぞれの教官に担当授業科目ごとに回答して頂いたもので、その回収数は191であった（教科集団によって配付方式が異なっているために、回収率は不明）。その内訳は、教養原論51（文系32、理系19）（人文および社会系列の教養原論の場合、専門基礎科目にも同じ科目名のものがあるために、記載が不十分の場合には両者の区別ができなかったために、全てを教養原論として扱った）、語学21、健康・スポーツ15、専門基礎科目73（人文および社会系列の専門基礎科目は教養原論に含めたことから、専門基礎科目は理系のみである。また、総合教養科目はこの時点では理系のもののみで、授業科目数も少なかったことから、専門基礎科目にに含めた）、科目区分不明31である。

今回のアンケート調査の調査項目と調査結果は、以下の通りであった。

ａ.昨年提出されたシラバスの原稿作成は

		Frequency	Valid Percent
①全く手間がかからなかった		51	28.7
②少し手間取った		115	64.6
③非常に手間がかかった		12	6.7
		13	Missing
	Total	191	100.0

ｂ.配布されたシラバスを読みましたか。

		Frequency	Valid Percent
①全く読んでいない		18	9.6
②自分の所だけ読んだ		30	16.0
③関連する他の教官の頁も読んだ		110	58.9
④自分の担当する科目以外の頁も読んだ		29	15.5
		4	Missing
	Total	191	100.0

ｃ.実際の授業はシラバスに書かれた計画とは

		Frequency	Valid Percent
①かなり異なる		21	11.9
②シラバスに沿うように努めたが，あまりうまくいかなかった		45	25.4
③だいたい，シラバス通りに進めることができた		111	62.7
		14	Missing
	Total	191	100.0

d.授業中に受講生にシラバスを見るように指示しましたか。

		Frequency	Valid Percent
①はい		58	31.7
②いいえ		125	68.3
		8	Missing
	Total	191	100.0

ｅ.別に，より詳細なシラバスを授業中に配布しましたか。

		Frequency	Valid Percent
①はい		23	12.8
②いいえ		156	87.2
		12	Missing
	Total	191	100.0

ｆ.シラバスは学生の学習に役だったと思いますか。

		Frequency	Valid Percent
①はい		94	64.8
②いいえ		51	35.2
		46	Missing
	Total	191	100.0

ｇ.現行のシラバスの掲載項目は，

		Frequency	Valid Percent
①妥当である		144	84.7
②多すぎる		22	12.9
③不十分		4	2.4
		21	Missing
	Total	191	100.0

ｈ.シラバスをセンターのホームページに載せて一般に公開しております。これについてどう思いますか。

	Frequency	Valid Percent
①知らなかった	130	68.8
②知っていたが見たことはない	40	21.2
③見た	19	10.0
	2	Missing
Total	191	100.0

ｉ.シラバスの発行形態について

	Frequency	Valid Percent
①現行通りの印刷形式でよい	126	68.1
②ホームページに載せるだけでよい	54	29.2
③別の形態（例えば，CD-ROM）	5	2.7
（複数回答者を含む）	18	Missing
Total	203	100.0

ｊ.シラバスを印刷して配布するとしたら配布対象はどの範囲までが望ましいと思いますか。

	Frequency	Valid Percent
①担当教官のみ	13	7.9
②全学教官	6	3.7
③担当教官と新入生	104	63.4
④全学の教官・学生	41	25.0
	27	Missing
Total	191	100.0

次に、アンケート調査に記載されていたご意見を、以下にまとめて示す。

・必要な情報は今のままで十分取扱えるので，あとは「デザイン」をpolish upするだけでよい。
・シラバスの内容を毎年更新することを前提とするが，毎年印刷して配布することが困難。むしろホームページで更新した方が良い。図書館，教務掛等の窓口のみに印刷した物を置けばよいのでは。
・学生が見る機会を多くできるなら，電子メディアでOK。
・いずれはホームページだけで良いと考えるが，現在は印刷物も必要であろう。但し，もう少し簡略にした物で良いのではないか。
・シラバスをホームページという形で公開する必要があるかどうか疑問に思う。
・希望者にはCD-ROMで配布すれば，必要な箇所だけコピーできて良いかもしれない。
・大変良いことです。シラバスを見て授業（同一科目名で異なる教官による）を選べるシステムだともっと良いのだが・・・。難しいことは十分承知しています。
・担当教官と新入生以外の全学の教官・学生に知らせるためにホームページの掲載は必要。
・膨大な資源と労力の浪費だから，できればやめてしまった方がよいが，文部省の手前そうもいかないでしょうね。
・学生全員に全ての頁のシラバスは不要。資源の無駄遣いだと思う。必要な頁だけ学生に取っていかせるようなシステムにしたらどうか？
・担当教官と新入生以外に，学科事務室に１冊配布願えれば，必要なときに見ることが出きる。全員に配布しても必要としない時（物）にとっては邪魔な物となる。

・厚く，重すぎます。学科学部別，必要な科目のみとか，学生が携帯しやすいようにできない物でしょうか。
・省資源，コストダウンの観点から，現在の厚い冊子を大学に配布するのはやめた方が良いと思う。
・CD-ROMは良いと思うが，現時点では学生には不適当と思う。CD-ROMにするならば全学のシラバスをまとめると良いと思う。
・全員（学生も教員も）が参照しやすくしておくこと。
・学部毎のシラバスもホームページに載せ，全体をリンクさせるべきと考える。
・当然全員が知るべきであるが，印刷配布するよりNetworkを利用すべき。
・学生便覧も全てNetwork上で検索できるようにする方が良い。
・現在の印刷の物はミスプリントが多い。
・シラバスをホームページに載せるのは反対です。どこか外部でチェックされていることを考えると，自由で学生のためになる講義はできなくなります。学内の者のみアクセスであれば良いのですが。
・せっかく作ったシラバスが受講する学生に配布されていないのは事実なのか？もしそうならば，こんな物を手間をかけて作る意味は全くない！
・学生に配布する際，大部にならないように，人文学，社会学，自然学程度に分け，分野ごとに必要な部分をまとめるようにしてはどうか。
・ミスプリントが多い。教官の書いた原稿は読みにくいことは事実かもしれないが，きちんと校正を！
・原稿を用意するときにTEXのformatなどがあると有り難い。
・健康スポーツのシラバスの中，運動種目についてはニュースポーツ以外種目名だけをあげておいた方が良いと思う。
・発達科学部の場合は学部のシラバスにも記載されているので印刷形式については重複する。印刷の必要はないのでは？
・「シラバス」という用語は公用語として不適当である。漢字表記にして欲しい。
・１回見れば終わりなので，印刷頁を減らす，わら半紙にする等の簡便化が必要では。
・資源の無駄遣いを減らすべき。あまりにも資源の浪費につながっていると思う。
・もう少しコンパクトな物と，詳細な物の２種類を用意して，前者を配布用，後者を（ホームページでも良い）閲覧用とした方がよい。
・詳細なシラバスは，印刷してもあまり見ないなど無駄になる恐れもあるので，有料制にして販売したらどうだろうか。（外国では，古くからそうしているところも多い）
・配布対象は全学教官（強化集団構成員全員でも可）と新入生がよい。
・白紙は削除して全学生に大教センターで配布。
・最初と話が違う。
・シラバスはもっと具体的な内容の分かる物にするべきだと思います。
・授業開始前に履修届を出すようなシステムにすれば，学生はシラバスをもっと真剣に読むようになるでしょう。
・現在の原稿作成では切り貼りに手間がかかるし，印刷のための時間・金銭もバカにならないので，フロッピーディスクでの原稿提出，いずれは（山形大学のように）Eメールでの送信による原稿提出へと移行すべきではないでしょうか。
・シラバスは，全学の教官と学生に配布して欲しい。学生の側からすれば，他学部の科目で聴講したい科目を見つけ出す手段となるだろう。教官の側からすれば，近接科目でどういう内容のことを学生が学べるかを知ることができる。それを自分の講義案を作成する際の参考にすることが可能になる。
・現在どの範囲まで配布しているのか知らない。

・年間予定はあまり意義を感じない。特に１－１５とふるのは良くない。講義の進行は柔軟な物だから。
・あまりにも大部で取り扱いに困る。殆どの授業が半期単位で行われていると思うので，半期に１冊発刊したらどうか。（編集・発刊の仕事が，多少増えるかもしれませんが・・・。）
・これだけ森林資源が問題になっている中，このような大部のものを上質紙に印刷するのはどうかと思う。
・大部になりすぎていて，恐らく学生は読まないのではないでしょうか？

アンケート調査結果を見ると、現行のシラバスは概ね好意的に受け入れられていて、講義の充実を図ったり、教官相互の授業内容の調整や協力のために利用しようという傾向が読み取れる。一方、その発行形態や配付対象については、意見が分かれるところであり、コメントのほとんどもこの点に関する言及であった。以下項目別にみると、原稿作成については、手間がかかった（手間をかけた）と答えた教官が予想以上に多かった。語学と健康・スポーツの場合、その他の授業科目とシラバスの形式が異なるので別にすると、とくに、理系の教養原論の担当教官でその割合が高く、80%近くに達している。ローテーションで担当教官が変わることや、授業の内容を毎年工夫し改善していることの現れなのであろう。次に、配付されたシラバスを自分のところ以外の部分も読んだ教官の割合は全体の70%を越えていて、とくに、文系の教養原論の担当教官の場合にはその割合が90%近くに達している。一方、実際の授業ではシラバス通りに授業を進められなかったと答えた教官が全体で見ると40%近い。ただし、これは健康・スポーツで特別に数字が高くなっているためで、それ以外で見ると、75～90%の教官がほぼシラバス通りに授業を進められた、と答えている。しかし、授業中にシラバスを見るように学生に指示した教官は少なく、より詳細なシラバスを授業中に配付している教官もまだ少ないことから、シラバスは年度初めに利用された後は、授業の度に活用されるところまでには至っていないことになる。その中にあって、教養原論の授業では比較的よく活用されていて、とくに、文系の教養原論では授業中にもシラバスを利用している教官が45%近くあり、より詳細なシラバスを授業中に配付している教官も30%を越えている。現行のシラバスは、教養原論のように一つの主題に対して複数の授業科目が開設されている場合に、より積極的に活用されているといえよう。

神戸大学では、現在、大学教育研究センターが各教科集団に依頼して全学共通授業科目のシラバスの原稿を作成してもらい、それを集めて大学教育研究センターのシラバスとして発行すると同時に、各学部の関係分をそれぞれの学部に回すことによって、それが各学部のシラバスに掲載されるというやり方を取っている。さらに、全学共通授業科目のシラバスは、大学教育研究センターのホームページに掲載されて一般に公開されており、さらに、CD-ROMの形にして学内の複数の図書館に設置したパソコンで見れるようになっている。また、各学部のシラバスはそれぞれの学部の全教官と学生に配付されているので、大学教育研究センターが発行する全学共通授業科目のシラバスは、学内においてはその担当教官（非常勤を含む）のみに配付し、学生用としては各学部の教務担当掛の窓口に備え付けてもらうようにお願いしている。これに対して、アンケートで見ると、シラバスがセンターのホームページに掲載されていることはほとんど知られておらず、また、シラバスの配付先も周知徹底されていないことが明らかとなった。一方、現行のシラバスの掲載項目は妥当であるとみなされていて、発行形態についても現行通りの印刷形式でよいという意見が大半であった。しかし、配布先に関して大きく意見が分かれている点や、積極的に意見を書いた教官は現行の大部のシラバスを痛烈に批判している点を考慮すると、発行形態および配布先について今後十分議論する必要がある。それぞれの関係分だけではあるが、印刷されたものが各学部のシラバスとして発行されているのであるから、方法と財源の問題を解決する必要があるであろうが、今後全学共通授業科目のみを集めたシラバスはインターネットを活用して公開する方向に移行し、授業期間中の学生とのコミュニケーションに利用することが考えられる。それが実現すれば、対応して原稿の作成方法も変わっていくことになるであろう。必要とあれば、インターネットからプリントアウトしたシラバスを簡易製本し、大学教育

研究センターや各学部の教務掛に備え付ければ、便利なこともあるであろう。後で議論するように、今後は、授業中に教官各自が一つの授業に対するシラバスを学生に配付することがより重要になるであろう。

４．まとめ

大学審議会による「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性輝く大学－」（答申）の「学部教育の再構築」の部分に、以下のような指摘がある。

我が国の大学制度は単位制度を基本としており、単位制度の実質化は教育方法の改善にとって重要な課題である。現在の単位制度は、教室における授業と事前・事後の準備学習・復習を合わせて単位を授与するものであり、学生の自主的な学習が求められる。このため、教室における授業だけでなく、授業の前提として読んでおくべき文献を明示するなど学生が事前に行う準備学習・復習についても指示を与えることが教員の務めである。

ところが、実際は単位制度の本来の趣旨が全く実質化していないことから、学生が1年間あるいは1学期間に履修科目登録できる単位数の上限を各大学が定めると同時に、個々の授業において1単位45時間という単位制度の趣旨にそった十分な学習量を確保することにより、単位制度の実質化を図ることを大学審議会の答申は強く求めている。学生の主体的学習を促し、教室における授業と学生の教室外学習を合わせた充実した授業展開を実現することが重要である、という指摘である。神戸大学でも、各学部はそれぞれの卒業単位数を考慮して、履修登録できる単位数の上限を早急に定めることが必要となってくる。と同時に、教室でやる授業に対し学生の方がアクティブに自ら勉強して成立するような、単位制度の趣旨に沿った大学らしいインターアクティブな授業を実現することが不可欠となるであろう。インターアクティブな授業をを実現するためには、教員が授業時間中に伝えるべき内容を検討することはもちろんのこと、それ以上に、学生がどのような準備をして授業に臨むのかを示すことが極めて重要となる。2単位科目の講義の場合、通常教室内で週1回2時間の授業を受け、1学期で15回、30時間分の学習をする。単位制度本来の趣旨を実質化するためには、これに付随して、教室外で各回2倍の4時間、1学期15週で60時間の学習が必要となる。合わせて90時間分の学習が成り立つような、授業の設計が必要になるが、この授業の設計を学生に伝える手段の一つが、これまで議論してきたシラバスである。今後いわゆるキャップ制が導入されることになると、シラバスが果たす役割は極めて大きくなる。

一方、アメリカの大学では、シラバスは次の2点で大学の教育評価と密接な関係を持つとされている（刈谷、1992）。すなわち、第1に大学全体のアクレディテーション（基準認定）に際して、実際にどのような教育が行われているかを評価するためにシラバスが集められる。シラバスは、外部からの大学評価にかかわる重要な情報源の一つとして位置づけられていることになる。第2には、シラバスは学生による授業評価と密接な関係がある。アメリカの大学における学生による授業評価には、シラバスに記載されている項目について評価を求めることが多いのである。日本でも大学審議会が、大学改革の取り組みを実行あるものにするための具体的な改革方策の一つとして、客観的評価システムを導入するために第三者評価機関の設置を提言している。また、教育研究の質を確保するための方策として、厳格な成績評価をのために成績評価基準を示すことを求めている。さらに、多くの大学で自己点検・自己評価の一環として、学生による教育指導の評価のアンケートが実施されるようになっている。このように見てくると、神戸大学でもシラバスを充実していくことが、今後益々重要になってくることは明白である。1つの授業科目について1ページを割り当てている現行の全学共通授業科目のシラバスに盛り込める内容は現在の掲載項目が限度であり、学生が履修科目を決めるためにはそれで十分であろう。その発行形態と配布先については議論の余地があることは、前述した通りである。今後の課題は、現行のシラバスをベースにして、教官各自が毎回の授業の際により詳細なシラバスを学生に配付することによって、いかに学生に主体的な学習を促すような授業展開を実現できるかにあるのであろう。

アンケートに御協力頂いた先生方、および、シラバスについて常々議論して下さった国際文化学部教務学生第2掛の佐藤祥二掛長と、データの整理を手伝ってくださった大学教育研究センター支援職員西嶋陽子さんに心からお礼を申し上げます。

参考文献

大学審議会（1998）21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性輝く大学－（答申）．226pp.

北海道大学（1998）来るべき新世紀に向けて－北大の新たなる展開のために－．平成9年度北海道大学年次報告書.

苅谷剛彦（1992）アメリカの大学・日本の大学－TA・シラバス・授業評価－．222pp.，玉川大学出版部，東京.

神戸大学大学教育研究センター（1998）SYLLABUS 98（全学共通授業科目等要覧）．513pp.